

③公立中高一貫校の大学合格実績はどのようなものか

シリーズ企画の最後は大学合格実績について見てみましょう。といっても愛知の県立中高一貫校から卒業生が出るのはまだだいぶ先なので、主に東京都立中高一貫校の大学合格実績を基に考えてみましょう。

中高一貫校と高校単独校とを比較してみる

■都立中高一貫校のタイプは2種類、都立高校はいろいろ

都立の中高一貫校は10校あります（このほかに公立では千代田区立九段中等教育学校があります）。2023年の東京の主要大学の合格実績を、この10校と都立高校10校とで比較してみたのが下記の表です。

都立中高一貫校				都立高校			
学校名	東大	早稲田大	慶應義塾大	学校名	東大	早稲田大	慶應義塾大
小石川	16	79	48	日比谷 ●	51	184	90
武蔵 ○	9	59	30	西 ●	17	139	82
両国 ○	6	41	31	国立 ●	10	129	72
三鷹	5	38	27	戸山 ●	9	75	51
立川国際	3	43	12	立川 ●	3	60	16
富士 ○	2	46	18	青山 ●	2	83	69
大泉 ○	2	43	19	八王子東 ●	2	53	17
南多摩	2	11	16	新宿	1	65	28
桜修館	1	57	37	小山台	0	58	36
白鷗 ○	1	18	14	三田	1	32	22

都立中高一貫校で○が付いているのが併設型、つまり愛知の県立中高一貫校と同じように高校でも募集する形態です。無印は中学からしか募集しない中等教育学校です。しかし東京の併設型は、学校により年度が異なるものの順次高校募集を閉じたので、今では都立中高一貫校はすべて高校での募集をしていません。

都立中高一貫校の併設型は開校時から中学募集の学級数のほうが高校募集の学級数より多く、高校募集のほうが少数派でした。そのため高校募集は人気がなく、入試の倍率も低倍率が続きました。それが高校での募集を閉じることになった最大の要因です。

愛知の県立中高一貫校はどこも中学での募集は2学級と少なく、高校募集のほうに比重が置かれているので、将来的にも高校募集を閉じるという方向にはならないと考えていいと思います。

都立高校で●が付いているのがもっともレベルの高い「進学指導重点校」、新宿、小山台が「進学指導特別推進校」（このほか5校が指定されています）、三田が「進学指導推進校」（このほか14校が指定されています）です。都立高校は普通科も数が多く、大学進学に向けてこのように3段階の指定が行われています。それぞれに選定基準が定められていて、それを達成できない場合は指定を外されます（現実にはまだそうしたケースはないのですが）。「進学指導推進校」から「進学指導特別推進校」へといった上のランクへの異動、新たに「進学指導推進校」に指定されるといったことは起きています。

選定基準について「進学指導重点校」の例を挙げると下記のようなものです。

- 共通テストの現役受験生について「5教科7科目で受験する者の在籍者に占める割合がおおむね6割以上」であること
- 現役受験生の共通テスト試験結果が「難関国立大学等に合格可能な得点水準（おおむね8割）以上の者の受験者に占める割合がおおむね1割以上」であること
- 東京大学、一橋大学、東京工業大学、京都大学、国公立大学医学部医学科という「難関国立大学等の現役合格者数が15人」であること

ときわめてシビアな条件になっています。

■卒業生数が大きく異なる

スペースの関係で表には各校の卒業生数を記載していませんが、都立中高一貫校と都立高校では卒業生数はかなり違います。さらに都立中高一貫校でも中等教育学校と併設型では異なります。2023年の卒業生数を見ると、中等教育学校は平均150名であるのに対し、併設型は平均200名になっています。一方都立高校は幅がありますが310名台が中心です。

どうしてこういう違いが出るのか、わかりやすく必要となる教室の数（学級数）で説明しましょう。仮に校舎には教室が24教室あるとします。

高校単独校

$$\text{高校募集} \\ 8\text{学級} \times 3\text{学年} = 24\text{学級}$$

併設型

$$\text{高校募集} \quad \text{中学募集} \\ 2\text{学級} \times 3\text{学年} + 3\text{学級} \times 6\text{学年} = 24\text{学級}$$

中等教育学校

$$\text{中学募集} \\ 4\text{学級} \times 6\text{学年} = 24\text{学級}$$

こういうことから高校3年の人数1=卒業生数が違ってくるのです。

愛知の県立中高一貫校は中学で2学級募集するので、その分高校募集は現行より減ることになります。該当する4校の高校募集は将来狭き門になると考えてください。

中高一貫校の大学合格実績は極めて良好

先の表を見て、お気づきのことがあると思います。

- 都立中高一貫校でも学校差が大きい。
- 中等教育学校も併設型も大学合格実績にそれほど差はない。
- 日比谷を除けば都立中高一貫校は都立の上位高校（表にある高校は186校ある都立高校の上位のごく一部）にそん色ない。
- 卒業生数を考えればむしろ上回っている。
- 都立中高一貫校すべての学校から東大合格者が出ている（都立高校で東大合格者が出ている学校は表にある9校を含め13校しかありません）。

ちなみに愛知の公立高校で東大合格者が出ている学校は11校あります（岡崎26、旭丘25、一宮13、刈谷11、明和7、時習館4、ほか岡崎北、菊里、瑞陵、豊田西、西春が各1）。このうち刈谷、明和が中高一貫校になるのですから大いに期待できると思います。*2023年度実績

公立中高一貫校は総合型、学校推薦型に強い

保護者の方の大学入試のイメージはほぼイコール一般入試（今は「一般選抜」と言います）ではないでしょうか。が、現在では大学入学者がどのような入試ルートで入ったかという点、下記のように、「総合型選抜」「学校推薦型選抜」の割合が高くなっています。私立大学では何と半数以上が一般選抜ではないのです。

[2023年度の大学入学者の募集形態別割合]

	総合型選抜	学校推薦型選抜	両方の合計
国立大学	5.9%	12.3%	18.2%
公立大学	4.1%	26.0%	30.1%
私立大学	17.3%	41.4%	58.7%

この「総合型選抜」「学校推薦型選抜」に公立中高一貫校は強いのです。東大の推薦入試（学校推薦型選抜）では都立中高一貫校10校のうち3校が合格者を出しています（小石川3、桜修館、立川国際各1）。都立以外でも千葉県立千葉、広島県立広島が各2、宮城県立仙台二華、茨城県立並木、横浜市立南が各1出しています。京大の特色入試でも京都府立洛北5、京都市立西京4、岡山県立岡山操山2など、公立中高一貫校が目立ちます。「一般選抜」はもちろんですが、「総合型選抜」「学校推薦型選抜」での進学の可能性も高いのです。

6年間の探究学習で、あるテーマについて深く勉強をしてきたことがこうした選抜に向いているのです。高校での授業形態が教科学習中心の時代は当然大学入試も教科学力をみる「一般選抜」中心になります。それが探究学習に比重を置くようになれば「総合型選抜」「学校推薦型選抜」が増えてくるのはある意味必然なのです。

まして次年度開校する愛知の4校はいずれも探究学習に力を入れるため、大いに期待できるのではないのでしょうか。

愛知の大学は総合型、学校推薦型の割合が高い

さて皆さんが気になるのは名古屋大学ではないでしょうか。下の表は文部科学省から公表された 2024 年度入試における各大学の募集形態別人員表です。

大学名	前期	後期	総合型、 学校推薦型	総合型、 学校推薦型の比率(%)
北海道大学	1,881	438	159	6.4
東北大学	1,601	90	668	28.3
筑波大学	1,310	159	600	30.0
東京大学	2,958	0	100	3.3
名古屋大学	1,731	5	371	17.6
名古屋工業大学	487	296	147	15.8
愛知教育大学	507	92	260	30.3
京都大学	2,601	20	152	5.5
大阪大学	2,872	0	361	11.2
九州大学	1,979	259	288	11.4
東京都立大学	887	207	434	28.4
名古屋市立大学	502	256	262	25.5
愛知県立大学	509	55	146	20.6
大阪公立大学	1,730	712	395	13.9

* 公立大学の中期日程の人員は後期日程に含んでいます

愛知の大学は「総合型選抜」「学校推薦型選抜」の割合が高いのです。この点でもこれから開校する中高一貫校の大学合格実績は高いものになることが期待されます。

3回にわたり公立中高一貫校をいろいろな角度から眺めてきました。「適性検査」の問題に挑むことは、生きていく上で必須である「読解力」「表現力」の養成にもつながります。

決して無駄にはならないので、「適性検査」にチャレンジしてみてください。